

550

135

季題類別

芭蕉名句選集

俳諧文庫第一編

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{6m} 1 2 3 4 5

始





季 題 類 別

芭蕉名句選集

俳諧文庫第一編

大正
15. 11. 16
内交



550-135

序

俳聖芭蕉は幽玄閑寂の句風に専ら志し、談林や古風のそれよりも遙に餘韻風致に富む蕉風の一派を開いた俳壇中興の祖師とも云ふべく、又彼れの最も爛熟を極めた頃は元祿三四年頃で當時は二千餘人の門弟が思慕し、俳壇の大勢は芭蕉の手中に確實に占有されるに至つた絶世の大天才であつた。

世に芭蕉の句を集めた類書の多きは實に驚くばかりでその數十指に餘るもその内容に至つて殆んど五十歩百歩の大同小異にすぎないが、本書は従來の書冊の中よりその長を採つて短なるを棄て、特にその秀句佳句のみを収録し、句數に於ても眞を置くに足るべきものを出來得る限り多く集め、殊に基本としては『年代別芭蕉俳句定本』

を準用しこれに季題を新年、春、夏、秋、冬、雑の六部に分ち、尙ほ天文、地理、時候、人事、動物、植物、雑の七項に細別分類し、研究者の容易にその求めんとする句を索引するに便ならしめ、元祿の大偉人を眼前に談論するの感あらしむるはひとり本書の誇とするところである。

大正十五年中秋

編者識

芭蕉名句選集目次

初日出	時	候	一	今朝の春	三
天文	新年の部	新年	一	宿の春	三
正月	元日	春日	二	去年	四
千代の春	君が春	花の春	二	人事	
			三	年玉	四
				年始	四
				方	四
				松	四
				菜	四
				窓	五
				口	五

目次	春の暮	臘	春夜	日永	遅日	餘寒	春寒	次郎月	二月	時侯	瀧津魚	苔清水	凍解	雪間

	一三	一三	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一一	一一	一一	一一	一一

種物	種蒔	茶摘	接木	沙干	雛祭	峰入	涅槃會	彼岸	初午	水取	夏近し	行人
.....
一六	一六	一六	一五	一五	一五	一五	一五	一四	一四	一四	一四	一三

春の部	橙	若松	野老	鹵菜	若菜	七種	植物	嫁が君	動物	若夷	春駒	年始
.....
	七	七	七	六	六	六	六	六	五	五	五	五

地理	春雨	臘月	貝寄風	東風	春風	糸遊	陽炎	薄霞	夕霞	朝霞	八重霞	霞	天文
.....
	一〇	一〇	一〇	九	九	九	八	八	八	八	八	七	

目次

糸	櫻	初	桃	木	芽	青	柳	椿	紅	梅	蚕	蝶
櫻		櫻		の	芽	柳	柳			梅	植	
.....
三四	三二	三二	三一	三一	三一	三一	三〇	二九	二九	二四	二四	二三

松	櫻	花	花	花	花	花	初	遅	山	兒	姥	八	大
の				の	雲		花	櫻	櫻	櫻	櫻	重	櫻
花	狩	見	盛	香
.....
四六	四六	四五	四五	四五	四四	三六	三六	三六	三五	三五	三五	三五	三四

目次

鳥	燕	呼	雲	鶯	花	花	待	と	芹	草	田	畑
の		子	雀		守	衣	花	ころ	の	餅	打	打
巢		鳥			堀	飯
.....
一九	一九	一九	一八	一七	一七	一七	一七	一七	一六	一六	一六	一六

蛇	蛙	蛙	田	干	白	獺	猫	雀	雀	歸	山	雉	巢
							の						立
	子		螺	鱈	魚	祭	戀	子		雁	鳥	子	鳥
.....
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二一	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	一九

目次

初夏	六月	五月	入夏	清時	夏の水	夏の海	夏野	五月富士	夏山	夏の月	夏の雨
.....
六一	六一	六一	六〇	六〇	五九	五九	五九	五八	五七	五七	五七

端午	粽	道明寺	青ざし	菖蒲茸	灌佛	秋近し	涼	短夜	夏夜	麥秋	竹醉日	暑
.....
六五	六五	六五	六五	六五	六四	六四	六二	六二	六二	六二	六二	六一

目次

鬼芹土落獨	菜の花	蒲公英	薺花	薑	葎若葉	躑躅	藤	山吹	若緑
.....
四九	四九	四八	四八	四八	四八	四八	四七	四七	四七

五月雨	入梅	雲の峯	風薫る	天文	夏の部	春	海苔	若葉	萩若葉	若草	春草	萱
.....
五四	五四	五三	五三	五三	五三	五一	五一	五〇	五〇	五〇	五〇	四九

目次	老	千	水	鹿	初	鯉	鮎	暮	雨	蝸	蟬	蠅	蚊	蚤
	鶯	鳥	鷄	の	鯉				蛙	牛				

	七六	七六	七六	七七	七七	七七	七七	七七	七七	七八	七八	七九	七九	七九

目次	蝻	若	夏	茂	夏	木	夏	若	若	散	松	楓	柳	木	下	閣	立	葉	植	物	蝻	
	
	七九	八〇	八〇	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一	八一

目次	納	汗	米	簞	夏	團	扇	土	夏	帷	夏	裕	更	幟
	涼	室	敷	敷	敷	扇	干	織	子	衣	衣	衣	衣	衣

	六八	六八	六八	六七	六七	六七	六七	六六	六六	六六	六六	六五	六五	六五

目次	啄	行	閑	時	茶	干	鶉	川	火	心	鶉	田	晝
	木	々	古	鳥	摘	瓢	川	狩	串	太	飼	植	寢

	七五	七五	七五	七一	七一	七一	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	六九	六九

三日	初月	天の川	秋空	天文	秋の部	夏雑	夏草	芦	水葱	鐵線花	玉卷芭蕉	深見草
.....
九五	九五	九五	九五				九二	九二	九二	九二	九一	九一

露時雨	露	白露	秋霜	秋風	野分	十六夜	後の月	月見	名月	月	今日の月	秋の月	宵月
.....
一一三	一一二	一一一	一一一	一〇八	一〇八	一〇七	一〇七	一〇六	一〇四	九七	九六	九六	九六

姫百合	蓮	撫子	芥子	杜若	花菖蒲	二十日草	牡丹	橘	卵の花	栗の花	筍	藤の實	李
.....
八六	八六	八六	八五	八四	八四	八四	八四	八三	八三	八三	八二	八二	八二

忘れ草	薺	藜	早苗	麥	初茄子	眞桑瓜	瓜	瓜の花	夕顔	晝顔	紅の花	紫陽花	合歡の花
.....
九一	九一	九一	九〇	八九	八九	八九	八八	八八	八七	八七	八七	八六	八六

	七	男	星	魂	盆	墓	駒	硯	御	重	納	秋	角
	夕	七	合	祭	提	參	迎	洗	遷	陽	弓	扇	力
人	事												
目	次	目	次	目	次	目	次	目	次	目	次	目	次
	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二

砧	藥	茸	蛙	漆	菊	雁	渡	鷺	四	稻	鳴	鹿
搦	狛	狩	馬	搔	膾	鳥	り	十	雀	雀		
動物												
目	次	目	次	目	次	目	次	目	次	目	次	目
	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五

霧	霧	秋	稻	地	秋	秋	刈	落	文	八	秋	初
時	雨	雨	妻	理	野	山	田	水	月	朔	來	秋
目	次	目	次	目	次	目	次	目	次	目	次	目
	一三	一三	一三	一三	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一六

今朝	一	殘	秋	秋	身	夜	肌	二	秋	秋	行	暮	秋
の	葉	暑	涼	の	に	寒	寒	百	深	暮	秋	秋	色
目	次	目	次	目	次	目	次	目	次	目	次	目	次
	一六	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一八	一八	一八	一九	二〇	二〇

目 次	初粟唐蕃鬼水葱落稻葛草芒蘭秋	茸	黍	椒	灯	葱	穗	花	花	花	海棠

	一四一	一四一	一四一	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一三九	一三九	一三八

天 女 部	冬	秋	紅	薄	草	大	芋	冬	瓢	茸	木	松
	の	葉	紅	の	の	根	瓜	瓜	狩	子	茸	茸
	部	雜	葉	葉	種	種	種	種	種	種	種	種

	一四三	一四三	一四三	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二	一四一	一四一	一四一	一四一

目 次	榎栗柿	紅	鮭	河	秋	蛸	簍	蟬	蟋	蜻	虫
	の	葉	鹿	蝶	蝶	虫	蟬	蛉	蛉	蛉	蛉
	實	鮎	物	鮎	鮎	鮎	鮎	鮎	鮎	鮎	鮎

	一三〇	一二九	一二九	一二九	一二八	一二八	一二八	一二七	一二七	一二七	一二七

目 次	女	萩	芭	白	菊	鷄	朝	蕎	芙	木	柳	蜜	木
	郎	蕉	菊	頭	頭	花	花	花	花	散	散	散	散
	花	蕉	蕉	蕉	蕉	蕉	蕉	蕉	蕉	蕉	蕉	蕉	蕉

	一三八	一三七	一三六	一三六	一三二	一三二	一三一	一三一	一三一	一三一	一三〇	一三〇	一三〇

目次終

目次

無季雜

雜

枯尾花	一七七
枯草	一七七
蕎麥刈	一七七
冬菜	一七七
麥生ゆ	一七七

目次

冬菜賣	一七〇
煤掃	一七〇
年忘	一七一
餅搗	一七一
衣配	一七二
年の市	一七二
年とり物	一七二
厄拂	一七二
動物		
都鳥	一七二
千鳥	一七二
鳴	一七三
鷓鴣	一七三
鷹	一七四

河豚	一七四
生海鼠	一七四
蠣	一七四
乾鮭	一七五
植物		
枯木	一七五
木の葉	一七五
落葉	一七五
散紅葉	一七六
寒梅	一七六
早咲梅	一七六
歸り花	一七六
寒菊	一七六
水仙	一七六

季題別 芭蕉名句選集

工藤靜波編

新年の部

◇天文

初日出

伊勢

に居て見る空いかに初日の出

◇時候

新年

大と

猿世の中よかれ酉の年

正月

正月も美濃と近江やうるふ月

芭蕉名句選集



元日

元日に田毎の日こそ戀しけれ

元旦や思へば淋し秋の暮

面白き朝の始めや三の花

くれくって餅をこだまのねびね哉

春立や新年古き米五升

春立つてまた九日の野山哉

あゝ春々大なるかな春と云々

伊勢が賣る家にも來たり千代の春

天秤や京江戸かけて千代の春

かぴたんもつくばはせけり君が春

君が春

千代の春

君が春

花の春

二日にもぬかりはせじな花の春

空の名残り惜まんと舊友來りて
酒興じけるに元日の晝まで臥し
曙を見はづして

誰人が孤着て居ます花の春

(又一説には)

こもを着て誰人ゐます花の春

嵐雪が送りし正月小袖を着て

今朝の春

誰れやらが姿に似たり今朝の春

庭訓の往來誰が文庫より今朝の春

宿の春

發句なり芭蕉桃青が宿の春

去年

去年は早そこへすされよ太郎月

◇人 事

年玉

もて來つるこれぞ年玉心だま

年始

小頭の數の子臭き年始かな

自畫自贊

惠方

惠方から曳くや今年も牛の玉

門松

門松や思へば一夜三十年

幾霜に心ばせをの松飾

庭にありて心ばせをの松飾

蓬萊

蓬萊に聞かばや伊勢の初便り

高き屋に登りて見ればの
御製の有難を思ひて

庭竈

叡慮にてにぎはふや民の庭竈

子の日

子の日しに都に行かむ友もがな

湖東無名庵に年を迎ふ時

三日口を閉ぢて題四日

筆初

大津繪の筆の初めはなにほとけ

春駒

鹽尻の尻も据はらず春の駒

若夷

年や人に取られていつも若夷

我が年を棚にあげてや若惠比須

◇動物

嫁が君

餓死やかざしにさせる嫁が君

◇植 物

七 種

四方にうつ薺もしどろもどろかな

古畑や薺摘み行くをとこども

一と年に一度摘まるゝなづな哉

菟藟に今日は賣り勝つ若菜哉

齒 若 菜 朶

齒朶の葉もなきにもちひの鏡かな

元朝感あり

飯を夢に折結ぶ齒朶の草枕

山家に年を迎へて

誰が聳ぞ齒朶に餅負ふ丑の年

菩提山

野 老

山寺の悲しさ告げよ野老堀

若 松

若松の四方に影さす光りかな

橙

橙や伊勢の白子の店さらし

夏の部

◇天 文

霞

大比叡やしの字を引きて一と霞

霞やら花の雲やら煙やら

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

季吟勸進帳卷頭

八重霞 和歌の跡とふや出雲に八重霞

奈良に出づる道にて

朝霞 春なれや名もなき山の朝霞

矢走歸帆

夕霞 夕かすみ赤石の浦を帆のおもて

薄霞 春なれや名もなき山に薄霞

陽炎 や柴胡の原の薄曇

陽炎に俯つくれ石の上

枯芝やまだ陽炎の一二寸

暗山旅宿

陽炎の我が肩に立つ紙衣かな

伊賀國阿波庄新大佛にて

丈六に陽炎高し石の上

野州室の八島にて

糸遊 糸遊びに結びつきたる煙かな

入りかゝる日も糸遊びの名残哉

春風 や煙筒くわえて船頭殿

奈良にて

春風や人聲うつる三笠山

東風 あち東風や面々さばき柳髪

名所八體の内

芭蕉名句選集

貝寄風

貝よする風の手品や和歌の浦

朧月

花の顔にはれてうれしや朧月

春雨

春雨や木の下につたふ雫かな

春雨や蓬を伸す草の道

春雨や叢吹きかへす川柳

春雨や蜂の巢傳ふ屋根の漏

古郷このかみが園中三草の種ありて

春雨や二葉に萌ゆる茄子の種

尾州笠寺奉納

笠寺やもらぬ窟も春のあめ

赤坂庵にて

不性さやかき起されし春の雨

◇地理

陸奥の猫山

雲間

山は猫ねふはいくや雲の間

吉野西行庵

凍解

凍とけて筆に汲みほす清水哉

吉野西行庵

苔清水

硯洗ふ智慧は出でたり苔清水

瀧津魚

勢あり氷消えては瀧津魚

◇時候

二月

裸にはまだきさらぎの嵐かな

杉風夢想

捧げたり二月中旬初茄子

次郎月

去年は早やそこへすされよ次郎月

春寒

春寒や垣根に残る雪こかし

餘寒

梅が香におひもどさるゝ寒さかな

瀬田夕照

遅日

遅き日にかわかぬ網の左袖

日永

暮遅き四ツ谷すぎけり紙草履

泊瀬にて

春夜

春の夜や籠人ゆかし堂の隅

隴

春の夜は櫻に明けてしまひけり

湖上眺望

唐崎の松は花より隴にて

田家の春の暮を偲ぶ

春の暮

入相の鐘も聞えず春の暮

鐘つかぬ里はなにをか春のくれ

留別

行春

行春や鳥啼き魚の目はなみだ

行春に和歌の浦にて追付たり

行春や白き花みゆ垣のひま

湖水を望みて春を惜む

行春を近江の人と惜しみける
白川は春の末なりたびまくら
夏近し其にたばく花の風

◇人 事

二月堂に籠りて

水取 やこもりの僧の杏のおと

二月吉日とて是橋が剃髮して

醫門に入るを賀す

初午 初午に狐のそりし頭かな
彼岸 今日彼岸菩提のたねを蒔く日哉

涅槃會 涅槃會や雛手合する數珠の音

伊勢にて

峰入 神坂やおもひもかけず涅槃像
峰入や一里おくる、小山伏
雛祭 内裡雛人形天皇の御宇とかや

日頃住める家は人に譲りて出ぬ此人なん
妻を具し娘孫など持てる人なりければ

汐干 草の戸も住みかはる代ぞ雛の家
青柳の泥に垂る、汐干哉
清ほど流る、沖の汐干哉
接木 捨物に梨の接穂や山屋敷

菜摘 摘みけんや茶を木枯の秋とも知らで
種蒔 この種と思ひこなさし蕃椒
種物 細かなる雨や二葉の茄子種

木白興行

畑打 畠うつ音やあらしの櫻あさ

對門人

田打 梅檀も一蹴づゝの田打哉

草餅 青ざしや草餅の穂に出でつらん

芹の飯 雨の手に桃と櫻や草の餅

我がためにはみ残す芹の飯

菩提寺

ところ掘 山寺の悲しさ告げよところ掘

侍花 侍花や藤三郎がよしの山

花衣 着ても見よ甚平が羽織花衣

花守 一里は皆花守の子孫かな

◇動物

鶯 鶯や餅に糞する椽の先

鶯に片付させん雀良

鶯や柳のうしろ藪のまへ

うぐひすや茶袋かゝる庵の垣

相國寺にて

芭蕉名句選集

うぐひすに感ある竹の林かな
在原寺にて

うぐひすと魂に眠るか橋柳
うぐひすにほこりと笹の水哉
鶯や竹の小藪に老を啼く
鶯や雀よけ行く枝移り
鶯のあかで啼く日は薄着哉
うぐひすの足雉子脛長く繼ぎそへて
水上は鶯ないて水浅し
雲雀より上に休ふ峠かな
原中やものにもつかず鳴雲雀

雲雀

永き日を轉り足らぬ雲雀かな
草も木もはなれ切りたる雲雀哉

甲斐猿橋

呼子鳥
水暗く日のまふ谷や呼子鳥
燕
煤ぼりしてごみやく家に啼く燕
盃に泥な落しぞ村燕
花に來て花野に歸る燕かな
壁土の家する木曾の燕かな

桑門宗波行脚を送る

鳥の巢
古巢ただ哀れなるべき隣哉
巢立せり鶉の子や海を戀ふるらん

芭蕉名句選集

雉子

雲雀なく中の拍子や雉の聲
うば石に啼かはしたるきゞすかな
蛇喰ふと聞けば恐し雉子の聲

高野にて

父母のしきりに戀し雉子の聲

山鳥

山鳥よ我れもかもねん宵まどひ

近世の辭

歸雁

雲と隔り友にや雁の生別れ

雀

茶畑に花見顔なるすゞめ哉

雀子

雀子と聲啼きかはす鼠の巢

猫の戀

猫の戀止む時閨の朧月

猫の戀竈の崩より通ひけり
惑ふなと犬踏みつけて猫の戀

田舎に在りて

麥飯にやつるゝ戀が猫の妻

膳所へ行く人に

白魚

白魚に價あるこそ恨なれ

藻にすだく白魚とれば消えぬべき
白魚や石にさはれば消えぬべし
あけぼのや白魚白きこと一寸

蜺子圖讀

芭蕉名句選集

白魚や黒き眼をあく法の網

常陸國下向に江戸を出る時送りの人に

干鱒

鮎の子の白魚送る別れかな
つゞじいけて其の蔭に干鱒さく女

吉野を下る時

田螺

飯貝や雨にくだりて田螺きく

蛙

袖よごすらむ田螺の海士のひまを波
古池や蛙とびこむ水の音

蛙子

哀れさは鳶の巢に啼く蛙かな
蛙子は目すり鱈をなく音かな

蛇

花に遊ぶ蛇なくらひそ友雀

蝶

蝶の羽の幾度越ゆる塀の屋根
起きよく我友にせんねる胡蝶
物好きや匂はぬ草にとまる蝶
蝶も来て酔を吸ふ菊の鱈かな
柗でのむ出茶屋の酒に蝶々かな
釣鐘にとまりて眠るこてふ哉
島原の草履に近き胡蝶かな
うつゝなき摘み心の胡蝶哉
伊勢武者の鍔にとまる胡蝶哉
ほね柴やかくと見るより蝶の殻
蝶の飛ぶばかりの野中の日かげ哉

芭蕉名句選集

もろこしの俳諧とはむ飛ぶ胡蝶

怒誰が製して贈りける筆の心殊に宜しければ

君や蝶我や莊子の夢ごゝろ
山の姿蠶が茶臼の露かな

蠶

◇植 物

梅が香にのつと日の出る山路かな
梅咲いて喜ぶ鳥の景色かな
梅咲くや臼の木の挽木のよき曲り
梅が香やしらゝ落窪京太郎

梅

梅折りて椿にまよふ袂かな
梅柳さて若衆かな女哉
數へ來ぬ屋敷くの梅柳
柳見に誘ふや梅の都人
この梅に牛も初音と鳴つべし
盛りなる梅に素手引風もがな
古里の梅や浪花の二年ごし
旅人の寢てからかすむ野梅かな
世に匂へ梅花一枝の鶺鴒
遠乗の出合がしらや原の梅
主なきをうらみ顔なる野梅哉

芭蕉名句選集

里の子よ梅折り残せ牛の鞭
春もやゝ景色とゞのふ月と梅
常の花のがれにけり梅の花
あこくその心は知らず梅の花
山里は萬歳遅し梅の花

錢乙州東武行

梅若菜まりこの宿のところ汁

網代民部の息に逢ひて

梅の木に尙ほ宿り木や梅の花

伊賀のある方にて

旅鳥古巢は梅になりけり

伊賀國の山家に雲丹と云ふものあり土の
底より掘り出て薪とす黒色にして惡き臭
あり

香に匂へ雲丹掘る岡の梅の花

秋風が鳴瀧の山家を訪ふ

梅白しきのふや鶴を盗まれし

何某新八去年の二月身まかりしを一周忌
の程に父梅丸子の方へ申遣しける

梅が香に昔の一字哀れなり

卓袋亭月待

月待や梅かたげ行く小山伏

岡女が家にて

芭蕉名句選集

暖 簾 の 奥 も ゆ か し 北 の 梅

伊勢の神垣の中には梅一本も見えず子良

の館の後に一本ありといへば

御子良子の一本床し梅の花

去來のもとへなき人の事など言ひ遣はす

菟 蕪 の さ し み 少 し 梅 の 花

山 家

手 涕 か む 音 さ へ 梅 の 盛 り かな

梅 が 香 や 見 ぬ 世 の 人 の 御 意 を 得 る

梅 白 し 年 た つ 色 の 小 醒 が 井

梅 椿 早 や 咲 ほ め ん 保 美 の 里

或る人の草の戸を訪ねけるに他に出ける
由にて年老たる男獨り留主居けるに垣根
の梅盛りけるをこれなんあるじと云ひけ
れば彼の男隣の梅にて候と申すに愈々興
失ひて歸り侍るとて

留 主 に 來 て 梅 さ へ よ そ の 垣 根 哉

一年都の空に旅寝せし頃道にて行脚の僧
と知人になり侍るに此春陸の奥見に行く
とて我が草庵を訪ねければ

又 も と へ 藪 の 中 な る 梅 の 花

紅 梅 や 見 ぬ 戀 つ くる 玉 す だ れ

鶯 の 笠 お と し た る 椿 かな

落 ち さ ま に 水 こ ぼ し け り 花 椿

芭蕉名句選集

葉に背く椿や花の餘所心
逃げ水や椿ながるゝ竹の奥
藪椿門は葎のわかばかな
富士に行き椿にかれ家を出づ
八九間空で雨降る柳かな
傘で押わけ見たる柳かな
餅雪を白糸となす柳かな
吹くたびに蝶々居直る柳かな
猿雖に對して
もろくの心柳に任すべし
腫物にさはる柳のしなひかな

柳

在原寺にて

鶯を魂にねむるか嬌柳

贈杜國

笠の緒に柳わかねる旅出哉

楊柳觀音の畫賛

青柳の我からむすぶ佛かな
芽柳古川にこひて芽をはる柳かな
木の芽切株の芽立を見れば櫻かな
桃の芽古寺の桃に米踏む男かな
煩へば餅こそくはね桃の花
満上下茜ほす日や桃の花

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

舟足も休む時あり濱の桃

尙白と伏見へ行く時

只一夜桃に宿かる伏見哉

伏見西岸寺にて上人に逢ひて

我が衣に伏見の桃の雫せよ

草庵に桃櫻あり門人に基角嵐雪あり

兩の手に桃と櫻や草の餅

初櫻

初櫻折りも今日はよい日なり

顔に似ぬ發句も出でよ初櫻

咲き亂す桃の中よりはつさくら

聲よくば歌はんものを櫻散る

櫻

木の下に汁も鯰もさくら哉

春の夜は櫻に明けて仕舞けり

詫しさを櫻の下の野人參

山の名を得散るをこそ櫻なれ

扇にて酒くむ蔭や散る櫻

笠のうらに書きつける

吉野にて櫻見せうぞ檜木笠

山家

鶴の巢も嵐の外に櫻かな

水口にて舊友に逢ふ

命ふたつ中に活たる櫻かな

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

探丸子の君別荘に花見催ふせ給ひけるに

罷りて

さまざまのことを思ひ出す櫻哉

送別

門口の櫻を雲の初めかな

風入馬蹄輕

木の下は蹄の風や散る櫻

糸櫻

糸櫻こや歸るさの足もつれ
半日の雨より長し糸ざくら

畫讚

犬櫻

吹く風に尾細うなる犬櫻

八重櫻

奈良七重七堂伽藍八重櫻

姥櫻

姥櫻さくや老後の思ひ出て

兒櫻

抱える事子のごとくせよ兒櫻

初瀬にて

山櫻

うかれける人や初瀬の山櫻

歌よみの先達多し山櫻

雨降りければ

草履の尻折りて歸らむ山櫻

上醍醐にて

留守といふ小僧なぶらむ山櫻

句空への文に

芭蕉名句選集

美 ま し 浮 世 の 北 の 山 櫻
 暮 れ か ね る 日 の ゆ か し さ よ 山 櫻
 山 櫻 瓦 葺 く も の ま づ 一 つ
 と し く や 櫻 を 肥 す 花 の 塵
 雲 は 南 の 枝 や お そ ざ く ら
 初 花 に 命 七 十 五 年 ほ ど
 花 の 蔭 硯 に か は る 丸 瓦
 花 に 舍 り 瓢 先 生 と 自 ら 云 へ り
 花 に 寝 ぬ 是 も た ぐ ひ の 鼠 の 巢
 花 咲 い て 七 日 鶴 見 る 麓 か な
 花 の 顔 に 晴 れ て う れ し や 朧 月

花 初 遲
花 櫻

鶴 の 巢 も 見 ら る ら 花 の 葉 越 哉
 暫 く に 花 の 上 な る 月 夜 か な
 春 風 に 吹 き 出 し 笑 ふ 花 も が な
 小 初 瀬 や 花 に 暮 れ 行 く は ん 袋
 世 に さ か る 花 に も 念 佛 申 し け り
 世 や 人 や 花 に も 其 智 三 十 里
 紙 衣 の 濡 る と も 折 ら ん 雨 の 花
 磯 山 や 櫻 を ゆ す る 波 の 音
 蝙蝠 も 出 で よ 浮 世 の 花 に 鳥
 阿 蘭 陀 も 花 に 來 に け り 馬 の 鞍

嵐 山

芭蕉名句選集

花の山二町登れば大悲閣

示門人

子に飽くと申す人には花もなし

上野の興

花に酔へり羽織着て刀さす女

露沾公にて

西行の庵もあらん花の道

孤石の陸の奥に行を送りて

むく起に隣の花の匂ひかな

尾張の人より淡酒一樽木曾の獨活一種贈

りしを門人にひろむとて

飲み明けて花活にせむ二升樽

支老東行餞別

此の心推せよ花に五器一具

瓢箪庵に膝を入れて旅の思ひいと安かり

ければ

花を宿に始め終りや二十日程

大和草尾村にて

花の蔭謠に似たる旅寢哉

酒呑み居人の畫に

月花もなく酒のむ獨り哉

秋風が鳴瀧の山家を訪ふ

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

櫛の木の花にかまはぬ姿かな

二見の圖を拜みて

凝ふな潮の花も浦の春

龍門にて二句

酒呑にかたらんかゝる瀧の花
龍門の花や上戸のみやげにせん

藏堂橋本子にて

土手の松花や木深き殿造り

洒落堂記

四方より花咲き入れる鳩の海
物皆自得

花に遊ぶ虻な喰ひぞ友雀

旅立ちける時

此の程を花に禮云ふ別れかな

花の下にて發句望まれて

花に明かぬ恨みや我が歌袋

坦堂和尚を惜む

地に倒れ根により花の別れ哉

憂方知酒聖貧始覺餓神

花に憂き世我酒白く飯黒し

三井寺の晚鐘

盃に片破はなしはなのかね

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

山邊郡宇智山

うち山やとさましらずの花盛

かつらぎ山の麓にて

猶見たし花に明けて行く神の顔
何の木の花とは知らず匂ひ哉

翌は檜木とかや谷の老木のいへることあ

り昨日は夢とすぎて翌はまだ来らず只生

前一椽の樂しみ外にあすくと云ひ暮し

て終に賢者の謗を受けぬ

淋しさや花のあたりの翌檜
日は花にくれて淋しや翌檜
古沓や花の旅出のひろひばき

花咲かばつげむと云ふや小短冊
先づ知るや宣竹が尺八花の雪

藏王堂にて

まだ咲かぬ花のありかや藏王堂
古寺に誰が植え捨し花一本
風なきに散るや若木の花櫻
此の花のあるじ顔なり尾長鳥

肅山のもとめにて探雪が描ける琴の譜に

散る花や鳥もおどろく琴の塵
花の山袈裟落されな坊主達
草いろくおのく花の手柄哉

芭蕉名句選集

僧專吟餞別

花雲 鶴の毛の黒き衣や花の雲

草庵

花の雲 鐘は上野か淺草か
蝶鳥のうはつき立つや花の雲

毘沙門堂の花盛四天王寺の榮花も是には
いかで勝るべき上なる黒谷下河原昔遍昭
僧正の浮世を厭ひし花頂山鷲の御山の花
の色枯にし鶴の林まで思ひ知られて衰れ
なり

觀世の蔓見やりつ花の雲

(又一説には)

觀音の櫻見やりつ花の雲

花の香

鐘消えて花の香は撞く夕べかな

花盛

花の香も同じ祝の白茶かな
種芋や花の盛りを賣りありく

吉野にて

花見

花盛り山は日頃の朝ぼらけ
てきちよくに蝶もてくるや花見酒
京は九萬九千群衆の花見哉
景清も花見の座には七兵衛
艶なる奴花見るや誰歌の様
花見にとさす舟遅し柳原

路通がみちのくに赴く時

櫻狩

草枕まことの花見して來よ
四つ五器の揃はぬ花見心かな
花を見る是れもたぐひか鼠の巢
櫻狩きどくや日々に五里六里
似合しや豆の粉飯に櫻狩
木曾路を経て武州の深川へ

思ひ出す木曾や四月の櫻狩

松島

松の花

松の花 苦屋見に來る夕べ哉

高砂の松は寛永年中に枯れけり今若木尙古を恐れけり

若緑

植かへて目出度松の緑哉

山吹

山吹や笠にすべき枝の形
山吹の露茶の花のかこち顔なるや

畫讚

山吹や宇治の焙焙の匂ふ時

西河

ほろくと山吹散るか瀧の音

大和行脚の時丹波市に日を暮して

藤

草臥れて宿かる頃や藤の花

那須靈岸寺の小庵を訪れて

留守に來て棚探する藤の花
氏もよし生立もよし藤の花

畫 譜

躑 躅 裾山や虹はくあとの夕つゝじ
ひとり尼薬屋すげなし白躑躅

二 葉 軒

葎若葉 藪椿門はむくらの若葉かな
葎さえ若葉はやさし破れ家
山路来て何やらゆかし葎草

呂丸が旅に死せしを悼む

薺 花 當歸よりあはれな塚のすみれ草
よく見れば薺花咲く垣根哉
蒲公英や雀も来てつめ松の風

菜の花 菜畑に花見顔なる雀かな
獨 活 雲間より薄紫の茅獨活哉
蔀 園ひろき徳ありてこそ蔀の苔
土 筆 麻福太が袴よそろや土筆
芹 悲しまんや墨子焼芹を見ても亦

石川北鯤生の舍弟山店子我が徒然を慰ん
とて芹の飯煮させて深川まで持ち来る是
青泥坊底の芹にやあらむとその代の詫も
今更に覺ゆ

鬼 薊 我がためか鶴哺残す芹の飯
花は賤の目にも見えけり鬼薊
萱 摘んで貧なる女機に倚る

春草 萱はまだ青葉ながらに茄子哉
木曾の情雲や生えぬく春の草
若草や狼かよふ道ながら

圓角房に賛を望むに

荻若葉 前後もまた若草の匂ひかな
芭蕉植えてさき憎む荻の二葉哉

龍尙舎に逢ふ有識の人に侍れば

物の名を先問ふ荻の若葉哉

乳母の心

若葉 十圍子葛の若葉につゝむべし

老懷

海苔

蠣よりは海苔をば老の賣もせて

千里が許にて

海苔汁の手際見せけり浅黄椀

◇春 雑

人も見ぬ春も鏡の裏の梅
櫻より松は二本を三月越し
あれこれを集めて昔は朧かな
末樂し比翼の中は花に鳥
物ほしや袋の中の月と花
月の鏡小春に見るや目の正月

芭蕉名句選集

梅干に通ふうぐひすあはれなり
爪行の末摘花のゆかりかな
行く末は誰れがふれん紅の花
肩はらふ面影にして紅の花
琵琶の湖の雨よ疎顔が松の律
矮屋妻奴の膝をいろよのみなるに心のま
よなる酒を吞て
傀儡の鼓うつなる花見なか

夏の部

◇天文

風薫る

激州亭納涼

小波や風の薫りの相拍子
風の香も南に近し最上川

石川丈山の像に

風かほる羽織は襟もつくるはず

羽黒山

有難や雪をかほらす南谷

小倉山常寂寺にて

松杉をほめてや風の薫る音
風薫る越の白根を國の花
雲の峰いくら崩れて月の山

芭蕉名句選集

湖や暑さをおしむ雲の峯

本間主馬が家に招かれて

入梅
ひらくとあぐる扇や雲の峯
二十九日さてこそ得たれ雲の峯
降る音や耳も酸ふなる梅の雨

信濃の洗馬

入梅晴の私雨や雲ちぎれ

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

五月雨に寒い儘なり旅姿

五月雨に御物遠や月の顔

五月雨や龍燈あぐる番太郎

五月雨や蠶煩ふ桑の島

五月雨の岩檜葉の翠いつまでも

五月雨も瀬踏尋ぬる水馴川

五月雨れて此笠森をさしも草

日の頃や葵かたむく五月雨

最上川

五月雨を集めて早し最上川

五月雨に鶴の足みぢかうなれり

屋張笠寺奉納繪馬

笠寺や窟ももらす五月雨

病中自詠

髪はえて容顔蒼し五月雨

奥州名取の郡に入りて中將實方の塚は何處にやと尋ね侍れば道より一里半ばかり左の方笠島と云ふ所にありと教ゆ折りふし降り續きたる五月雨いとわりなく打ち過ぐるに

笠島はいづこ五月のぬかり道

露川へ申侍る

五月雨に鳩の浮巢を見にゆかむ

中尊寺にて

五月雨の降り残してや光堂

阿隅川の水源にて

五月雨は瀧ふり埋む水嵩哉

落柿合類破

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

大井川出水で島田塚本氏が許に留まる

五月雨の雲吹き落せ大井川

五月雨や桶の輪きれる夜の音

明石瀉幸ひ雨の降る日かな

檜山や柴して戻る夏の雨

夏の雨
夏の月

夏の月御油より出でて赤坂や
松島や水を衣裳に夏の月
大井川波に塵なし夏の月
手を打てば訝に明る夏の月

芭蕉名句選集

嵯峨に籠りし日

清瀧や波に塵なし夏の月
夏の夜やこだまに明る夏の月

須磨にて二句

月あれど留守のやうなる須磨の夏
夏見てももの足らはばや須磨の夏

◇地理

夏山

夏山や紙漉く里は飯時分
夏山や杉に夕日の一里鐘

那須光明寺にて

五月富士
夏野

夏山に足駄を拜む首途かな

五月三十日富士の思ひ出らるまゝ

目にかゝる時やこと更五月富士
秣刈る人を栞の夏野かな

甲斐の郡内と云ふ處に至る途中苦吟(畫

讚なりとも云ふ)

馬ぼくく我を繪に見る夏野哉

落悟ぬし雅ものを失ひしを悼みて

夏の海
もろき人に譬へん花も夏野哉
遠浅や夏の日の出の舟こゝろ

松島にて

芭蕉名句選集

清水

島々や千々に碎けて夏の海
結ぶより早や齒にひどく清水哉
さゞれ蟹足這ひ上る清水哉

岐阜山にて

城跡や古井の清水先づ問はむ

那須温泉明神柏殿に入幡宮を遷し奉りて

兩神一方に拜まれ給ふ

湯を結ぶ誓も同じ苔清水
露凍てゝ筆に汲み干す清水哉

◇時 候

入夏 夏來ても只一つ葉の一つかな

五月

海は晴れて比叡降りのことす五月哉

嵐山

六月

六月や峰に雲おく嵐山

水無月

水無月や鯛はあれども鹽鯨

水無月やから鮭拜む野栖山

水無月は腹病やみの暑さ哉

雪の鰻左勝水無月の鯉

初夏

暫くは瀧にこもるや夏の初め

暑

蛤の口しめてゐる暑さかな

暑き日を海に入れたり最上川

水因亭にて

竹 醉 日
 降 不 ず と も 竹 植 え る 日 簑 と 笠
 麥 秋
 秋 や 須 磨 々 々 秋 知 る 麥 日 和
 夏 夜
 夏 の 夜 や 崩 れ て 明 け て 冷 し 物
 夏 の 夜 は 木 魂 に あ く る 下 駄 の 音
 短 夜
 短 夜 や 驛 路 の 鈴 の 耳 に つ く
 涼 夜
 涼 し さ や ほ の 三 日 月 の 羽 黒 山
 涼 し さ や 直 に 野 松 の 枝 の 形
 涼 し さ を 繪 に 寫 し け り 嵯 峨 の 竹
 汐 越 や 鶴 脛 ぬ れ て 海 涼 し
 松 風 の 落 葉 か 水 の 音 涼 し
 小 鯛 さ す 柳 涼 し や 海 士 が 軒

こ の 邊 り 目 に 見 ゆ る も の 皆 涼 し
 尾 花 澤 清 風 亭 に て
 涼 し さ を 我 が 宿 に し て 寝 ま る 也

文鱗先生出山の御形を贈りけるを安置して

南 無 佛 草 の 臺 も 涼 し け れ

野水閑居を思ひ立ちけるに

涼 し さ は 差 圖 に 見 ゆ る 住 居 哉

初下り小夜の中山にて

命 な り わ づ か の 笠 の 下 す 々 み

山岸半残が會

芭蕉名句選集

百里來たる程は雲井の下涼み

風瀑を餞別す

忘れすば佐夜の中山にて涼め
夕暗や櫻に涼む浪のはな
涼しさや竹振り行く藪通り
秋近き心の寄るや四疊半

◇人 事

奈良にて鹿の子を産むを見て此の日に於ておかしければ

灌佛の日に生れ合ふ鹿子哉

菖蒲葺 青さし
菖蒲生へり軒の鱒の觸體
青さしや草餅の穂に出でつらむ

不ト亡母追悼

道明寺 水向けてあと問ひ給へ道明寺
粽結ぶ片手にはさむ額がみ
端午 あすや粽難波の枯葉夢なれや

醫王寺佐藤庄司が舊跡の寺なり義經の太

刀辨慶の笈をとめて什物とす

幟 更 衣 拾
笈も太刀も五月に飾れ紙幟
一つ脱いでうしろに負ひぬ更衣
古拾物見の松にはづかしや

芭蕉名句選集

卯月の米庵に歸りて旅の疲れをほらす程に

夏衣

夏衣いまだ虱をとり盡さず

杉風生夏衣いと清らかにして贈りければ

帷子

いでや我よき布着たり蟬衣

夏羽織

辨慶は夏も紙子の羽織かな

別れは笠手にさげて夏羽織

千子がみまかりけるを聞きて美濃の國より去來が許へ遣しける

土用干

なき人の小袖も今や土用干

かけて置く拂子の智慧の土用干

上 巳

扇

龍宮もけふの汐路や土用干
物かいて扇引き裂く餘浪かな
富士の風や扇にのせて江戸土産

盤齋後向の像、世の中をうしろになして山里に背きはてゝも墨染の袖と云ふに

團扇

團扇もてあふがん人のうしろ向き

秋鴉主人の佳景に對す

夏座敷

山も庭も動きいるゝや夏座敷

晋の淵明を羨む

簞

窓形に晝寢の臺や簞

新庄且永亭にて

氷室 汗

水の魚氷室たづぬる柳哉
汗水や吉野とまりの笈山伏
汗の香に衣ふるはん行者堂

酒田の湊淵庵不玉のもとにて

納涼

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
箔押せよどちらも身のため夕涼
破風口に日影や弱る夕納涼
皿鉢もほのかに響く夕納涼
川中の根木によるこぶ涼み哉

住ける人外にかくれてむぐら生ひしげる

下跡をとひて

晝寝 田植

ひやくと壁をふまひて晝寝哉
柴つけし馬の戻りや田植酒
風流の初めや菊の田植かな

幼住庵にて

東路の毛すね恥かし床すゞみ

東武より上りて人に對面す

川風や薄かき着たる夕すゞみ

四條河原の夕涼

飯あふぐ鼻が馳走や夕納涼

田舎と云ふ題に

瓜作る君があれなと夕すゞみ

田一枚植えて立ち去る柳かな

尾張の舊友に對す

鶉飼

世を旅に代かく小田の行戻り
乗りたやと子の聲聞き鶉飼舟

鶉舟も通りすぎるほどに歸るとて

心太

面白うてやがて悲しき鶉舟哉

火串

清瀧の水くみよせてところてん
あやならぬいろはも書きて火串かな

川狩

川狩や伊勢武者はみな赤禪

鶉川

一文の酢の錢落す鶉川かな

干瓢剥く
茶摘

夕顔に干瓢むいて遊びけり
摘みけむや茶を風の秋とも知らで

◇動物

時鳥

時鳥啼きくとぶぞ忙はし

時鳥聲横ふや水の上

時鳥いまだ俳諧師無き世哉

時鳥正月は梅の花咲けり

黒焼釜割つて捨てけり時鳥

口江れ油月夜の時鳥

啼けや啼け耳するなる時鳥

芭蕉名句選集

田や麥や中にも市の時鳥
鳥賊賣の聲まぎらはし時鳥
清く聞かん耳に香炷いて時鳥
橋やいつの野中の時鳥
木がくれて茶摘みも聞くや杜宇
岩躑躅染むる涙や不如歸
曙やまた朔日にほととぎす
子規招くか麥の村尾花
郭公啼くや五尺の菖蒲草
郭公啼くや黒戸の濱鹿
嵯峨にて二句

時鳥 大竹藪を洩る月夜
京に居て京なつかしや時鳥

鐵招が峰に登る二句

時鳥 消え行く方や島一つ
須磨のあまの矢先に啼くや時鳥
那須野にて

野を横に馬引き向けよ時鳥

不卜一周忌琴風勸進

時鳥 啼く音や古き硯箱

日光裏見の瀧

時鳥 裏見の瀧の裏表

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

さし竿かきたる扇に

鳥さしも竿や捨てむ時鳥

陸の奥一見桑門同行二人那須野篠原を尋

ねて猶ほ殺生石を見んと急ぎ侍る程に雨

降り出でければ

落ち来るや高久の宿の時鳥

笈負僧

見えばやな出立くの時鳥

大徳寺にて

不如歸繪に啼け東四郎次郎

戸の口と云ふ所にて

戸の口に宿札名乗れ時鳥

探題實盛

名のれく雨篠原の不如歸

箱根山を越へる時都の友に申し遣す

忘るなよとは雲助蜀魂

待たぬのに菜賣りは來たが時鳥

一聲の江に横ふやほととぎす

見返りの松の梢やほととぎす

きのえ子に寝て待つ程ぞ時鳥

うき我を淋しがらせよ閑古鳥

能なしの眠たし我を行々子

啄木鳥の柱をたたく住居かな

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

四度び結びたる深川の庵を立ち出づると
て

老 鶯 鶯や竹の子藪に老を啼く

鶯の老を啼くなり茶木畠

千 鳥 闇の夜や巢をまとはして啼く千鳥

奥州白河にて

水 鶏 關守の宿を水鶏に問はうもの

大津湖仙亭

此の宿は水鶏も知らぬ扉かな

露月がともがら佐屋まで道送りして共に

山田氏が家に假寐す

水鶏啼くと人のいへばや佐屋泊り

舊友に別る

鹿の角 二股にわかれそめけり鹿の角

初 鯉 鎌倉を生きて出でけん初松魚

又越えん佐夜の中山初松魚

鯉 松魚賣いかなる人を酔すらん

美濃の國にゐて辰の年

鮎 またたくひ長良の川の年魚鮎

鮎の子の白魚送る別れかな

庄内清風亭にて

墓 這ひ出でよかひやが下の蟾の聲

雨 蛙 松明に酔ふ敷柱に雨蛙

芭蕉名句選集

須磨にて

蝸牛 蝸牛角ふり分けよ須磨明石
梢よりあだに落ちけり蟬の殻

立石寺

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

無常迅速

頓て死ぬけしきは見えす蟬の聲

稻荷山

撞く鐘もひどくやうなり蟬の聲
木のかげに蟬ばかり動く夕べかな
聲に皆鳴きしまふてや蟬の殻

蠅

森川許六錢別

うき人の旅にもならへ木曾の蠅

秋の坊を幼住庵留めて

蚊

我が宿は蚊の小さきを馳走かな

尿前の山家にて

蚤

蚤虱馬の尿する枕もと

晝見れば首筋赤き螢かな
愚にくらく荆をつかむ螢かな
草の葉を落ちるより飛ぶ螢哉
おのが火を木々の螢や花の宿

上林三入亭

芭蕉名句選集

螢見や船頭醉ふておぼつか

木曾の旅を思ひ立ちて大津に留る頃瀬田の螢見に出て

此螢田毎の月にくらべ見む

◇植 物

日 光 山

若 葉 あら尊青葉若葉の日の光

唐招提寺にて

若葉して御目の雫ぬぐはゞや

幼住庵の記

夏木立 先づたのむ程の木もあり夏木立

茂

木啄も庵は破らず夏木立
嵐山藪の茂りや風の筋

木下閣

雲の根に富士は杉なりの茂りかな
須磨寺に吹かぬ笛きく木下閣

夏 柳

水の奥氷室尋ねる柳かな

檮

とんみりと檮や雨の花曇り

若 楓

きのふけふ檮に曇る山路かな
若楓茶色になるも一盛り

散松葉

清瀧や浪に散り込む青松葉

松の花

松の花苦家見に来る序かな

芭蕉名句選集

榎の花
イ々と榎の花の袖に散る

落柿舎

抽の花
柚の花に昔しのばん料理の間
桑の實や花なき蝶の世捨て酒
李青く竹笠破れて石あぶなし
藤の實は俳諧にせん花のあと
竹の子や稚き時の繪のすさび

小督墳のにて

うきふしや筍となる人の果
老僧の竹の子拜む泪かな
新麥や竹の子時の草の露

栗の花
世の人の見つけぬ花や軒の粟
卯の花
卯の花や暗き柳の及び腰

其角が母五七日追善

卯の花も母なき宿ぞすさまじき

悼圓覺寺大願和尚

梅戀ひて卯の花拜む泪かな

金の扇に卯の花書きたるに句せよと望ま
れて

橋
白かねの花咲く井出の垣根哉
駿河路や花橋も茶の匂ひ

尾張より東武に下る時

牡丹

牡丹葉深く分け出る蜂の名残哉

贈桃隣所宅自畫賛

二十日草

寒からぬ露や牡丹の花の露
散る時もあるればこそなれ二十日草

留別

花菖蒲

あやめ草足に結ばん草鞋の緒
花菖蒲一夜に枯れしもとめ哉
菖蒲生けりや軒の鯛のされかうべ

杜若

杜若似たりや似たり水の影
手のとどく水際嬉し杜若

大阪にて

杜若語るも旅のひとつかな

鳴雪知足亭にて

杜若我に發句の思ひあり

藤枝

芥子

爰も三河紫麥の杜若
ありがたき姿拜まむかきつばた
白芥子や時雨の花の咲きつらむ
須磨にて

蝨の顔先が見らるゝや芥子の花

贈杜國

白芥子に羽もぐ蝶のかたみ哉

撫子

いく秋の迫りて芥子のかくれけん
酔ふて寝ん撫子咲ける石の上

正成の像、鏡肝石心此人之情

蓮

撫子にかゝる涙や桶の露
枝なくて世にかゝはらぬ蓮かな

本間主馬が家の名を稱して

姫百合

蓮の香に目を通はずや面の花

合歡の花

美しきその姫百合や后さね

紫陽花

象潟や雨に西施が合歡の花
紫陽花や帷子時の薄淺黄

紫陽花や藪を小庭の別座敷

紅の花

清風亭二句

行く末は誰肌ふれん紅の花

晝顔

肩掃を俤にして紅の花

晝顔に米搗涼む哀れなり
晝顔や町になり行く杭の敷

奇香亭にて

晝顔の短夜ねむる晝間かな

晝顔ひる寝せうもの床の山
子供等よ晝顔咲きぬ瓜むかん

夕顔

夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて
夕顔に干瓢むいて遊びけり

夕顔に見とるゝや身もうかりひよん
 夕顔や酔ふて顔出す窓の穴
 夕顔や秋はいろくの瓢かな
 夕顔やかいまはるほど秋は來ぬ
 瓜の花雫いかなる忘れ草
 夕にも朝にもつかず瓜の花
 花と實と一度に瓜の盛りかな
 瓜の皮むいた處や蓮臺野
 朝露によこれて涼し瓜の泥

住めける人の外に隠れて葎生ひ茂れる古
 跡を訪ふて

眞桑瓜

瓜つくる君があれなと夕涼納
 山陰や身をやしなはむ瓜ばたけ
 闇の夜と狐下這ふ玉眞桑
 眞桑瓜堅にやわらむ輪にやせむ
 柳行李片荷は涼し初眞桑
 之道に對す

初茄子

我れに似な二つにわれし眞桑瓜
 珍らしや山を出羽の初茄子
 島田塚本氏にて

麥

ちさははまだ青葉ながらに茄子汁
 麥の穂を涙に染めて啼く雲鳥
 芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

甲斐の山家に立寄りて

行駒の麥に慰む宿りかな

蓬桑門

いざともに穂麥くらはん草まくら

五月十一日武府を出て故郷に赴く人々川崎まで送り來りて餞別の句を云ふそのかへし

麥の穂をたよりにつかむ別れ哉

しのぶの里もじづりの石訪れて

早苗つかむ手元や昔しのぶ摺

奥州白河にて

早苗にも我色黒き日數かな

藜やどりせむ藜の杖になる日まで

甲斐の山中にて

山賤の願閉づる葎かな

忘れ草さびしさよ右も左も忘れ草

深見草風月の財を忘れよ深見草

玉卷芭蕉青苔や玉卷く芭蕉一株二株

芭蕉名句選集

鐵線花

ちらば散れ千里一風の鐵線花

水葱

なまぐさし小なきが上の脆の腹

芦

物の名をまづ問ふ芦の葉かな

奥州高館にて

夏草

夏草や兵どもが夢のあと

殺生石

石の香や夏草赤く露暑し

◇夏 雜

井將氏水樓

世の夏や湖水に浮ぶ浪の上

隈武の松にて

櫻より松は二本を三月越
馬に寝て残夢月遠し茶の煙り
寒からむ露や牡丹の花の蜜
語られぬ湯殿にぬらす袂かな

羽黒山にのぼる

有難や雲をかほらす南谷
光り合ふ二つの山の茂りかな
夏豆の二葉や麥の株かへし
捕へたき聲ばかりなる芦間哉
合歡の木も葉ごしも厭へ星の影

芭蕉名句選集

門に入れば蘇鐵に蘭の匂ひかな
百里來るほどは雲井の下涼し
朝よさを誰松島で片心
早乙女に仕方のぞまん信夫摺

嵯峨の雅因を訪れて

うは風に音なき麥と枕元

洛東芭蕉庵にて

蕎麥あしき京をかくして穂麥かな

秋の部

◇天文

秋空

蝶鳥のしらぬ花あり秋の空

天の川

水學も乗もの貸さん天の川

初月

荒海や佐渡に横ふ天の川

初月

初月や向に家のなきところ

三日月

三日月や早手にさはる草の露

三日月や朝顔の夕べつぼむらむ

三日月に地は朧なり蕎麥の花

三日月は正月ばかりまことにて

嵐蘭が墓に詣でて

見しやその七日は墓の三日月
何事の見立にも似ず三日の月

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

ありとある譬へにも似ず三日の月
二十日過ぎ出づるや名残三日の月
見るかげやまだかたしくも宵月夜
男振り水呑顔や秋の月
汐やかね須磨よ此湖秋の月
木を伐つて木口を見ばや今日の月
今日の月

義仲寺にて

三井寺の門敲かばや今日の月
たんたすめ住めば都ぞ今日の月
蒼海の浪酒臭しけふの月

古將監古實を語りて

月

月やその鉢の木の日の下
月すむや狐こはがる兒の供

唯止亭題月下送兒

善光寺にて

月影や四門四宗も只一
山寒し心の底や水の月
又明けぬ心はいかに窓の月
眺むるや江戸には稀な山の月
水油なくて寝る夜や窓の月
我宿は四角な影や窓の月
あの中に蒔繪かきたし宿の月

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

桂男すますなりけり雨の月

旅窓長夜

九度起ても月の七つかな

袋蟲庵

今宵誰吉野の月も十六里

小夜の中山にて

馬に寝て残夢月遠し茶の煙

姨捨山にて

梯や姨ひとりなく月の友

川船やよい茶よい酒よい月夜

見る影やまだ片影も宵月夜

影は天の下照る姫が月の影
やすくといでよいさよう月の雲
月ぞしるべこなへ入らせ旅の宿
米呉るゝ友を今宵の月の客
芋の葉や月待つ里のやけ島
實にや月間口千金の通り町

東順傳

入月のあとは机の四隅かな

燧山

義仲の寢覺の山か月悲し

越の山中の温泉にて

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

山中や越路の月はまた命

氣比の明神

月清し遊行の待てる砂の上

湯尾峠

月に名を包みかねてや瘡瘡の神

濱

月のみか雨に角力もなかりけり

日暮れて外宮に詣つ

三十日月なし千年の杉を抱く嵐

石山秋月

砂焼ぬ須磨は此湖の秋の月

悼遠流失天看法師

其魂を羽黒にかへせ法の月

深川の末五本松とか云ふ處にて

川上と此の川下や月の友

わびて住め月訛齊の奈良茶歌

明月のよそほひとて芭蕉五本を植えて

芭蕉葉を柱にかけん庵の月

正秀亭初會

月代や膝に子を置く宵の中

仲秋の夜敦賀に泊りぬ主人の物語に此の
海に鐘の沈みて侍るを國の守の蛋を入れ
て尋ねさせたまへど龍頭下さまに落ちて

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

引き揚ぐべき便なしと聞て

月いづこ鐘はしづめる海の底

鹿島根本寺にて

月早し梢は雨を待ちながら

舟中に一夜を明して曉の空蒼より頭さし
出して

明け行くや二十七夜も三日の月

斜嶺亭戸を開けば西に山あり伊吹と云ふ

花にもよらず雪にもよらず唯是孤山の徳

あり

其のまゝに月もたのまじ伊吹山

柴の庵と聞けば賤しき名なれど世に好し

きものぞありける此の歌は東山に住ける
僧を訪れて西行上人の詠ませ給ふ由山家
集にのせられたりいかなる主人にやとこ
のもしくて或る草庵の坊に遣しける

柴の戸の月は其のまゝ阿彌陀坊

伊勢國又玄が宅に留められ侍る頃その妻
の男の心に等しく物毎まめやかに見えけ
れば旅の心を安くしてし侍りぬかの日向
守の妻髪を切りて酒をまうけられて心ば
せ今更思出て

月さえよ明智が妻の話せむ

其柳亭

秋はやはらつく雨に月のかげ
武藏野の月の若はえや松島種

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

鎖あけて月さし入れよ浮御堂
 菊に来て奈良と浪波は宵月夜
 下戸の身に寒き池田の月夜かな
 名月や湖水に浮ぶ七小町
 名月や兒達並ぶ堂の椽
 名月や我家にもどる門徒坊
 名月や西にもほしき窓一つ
 名月に麓の霧や田の曇
 名月やたしかに渡る鶴の聲
 名月や我と筆架の影法師
 名月の花かと見えて綿島

名月

名月の二つあつても瀬田の橋

深川

名月や門にさし来る潮かしら

敦賀夜泊

名月や北國日和定めなき

隠士等裁を訪れて

名月の見處聞かん旅寝せん

武藏守泰時仁愛を先とし政以去欲先とす

とあり

明月に出づるや五十一ヶ條
 明月や池を廻りて夜もすがら

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

夏かけて名月暑き涼みかな
重々と名月の夜や茶白山
名月に鶴脛高き遠干鴻

西行の歌の心をふまへて

月見

雲をりく人を休める月見哉
座頭か人とに見られて月見哉
寺に寝てまこと顔なる月見哉
賤の子や稻すりかけて月を見る
月見せよ玉江の芦を刈らぬ先

古寺翫月

月見する座に美しき顔もなし

今日今宵寝る時もなき月見哉
實にや月間に千金の通り町
升かふて分別かはる月見哉

淺水の橋を渡る俗にあさうつと云ふ清少
納言の橋はとある一條あさむつのと書け
る處とぞ

後の月

あさむつや月見の旅の明けはなれ
木曾の疲もまだ直らぬに後の月
物識の心とひたし後の月
橋桁のしのぶは月の名残かな
十六夜もまた更科の都かな
十六夜はわづかに闇の初めかな

十六夜

芭蕉名句選集

野分

猪もともに吹かる野分かな
吹き飛ばす石は浅間の嵐かな

茅屋の感

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな

栗津清嵐

さぞ野分人の淡だつ市の聲
穂芒に思ふまゝなる野分かな
見どころのあれや野分の後の菊
義朝の心に似たり秋の風
身に泌みて大根からし秋の風
牛部屋に蚊の聲弱し秋の風

秋風

秋風や桐にうごいて蔦の霜
秋風ややり戸の口の尖り聲
秋風や伊勢の墓原尙ほ凄し

題 虫

蛛何と音を何となく秋の風

一笑追善

塚も動け我が泣く聲は秋の風

贈桃天號

桃の木その葉散らすな秋の風

那谷観音にて

石山の石より白し秋の風

途上吟

あか／＼と日はつれなくも秋の風

伊勢紀行の跋

西東あはれさ同じ秋の風

野水が旅行を送りて

見送りのうしろや淋し秋の風

座右の銘

人の短をいふこと勿れ己が長を説く事な

かれ

物いへば唇寒し秋の風

憐捨子

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

不破の關にて

秋風や藪も鳥も不破の關

嵐蘭を悼む

秋風も折れて悲しき桑の杖
杖もろし緋唐紙やぶる秋の風
松植えて竹のほしさよ秋の風
鶉の嘴のはたをさすらむ秋の風
母の白髪を拜みて

秋霜
手にとらば消えん泪ぞあつき秋の霜

如行が席上の饗應を制して

白露
白露のさびしき味を忘るゝな

畫 讃

露

西行の草鞋もかゝれ松の露

草 庵

道細し角力取草の花の露

今日よりは書付消さん笠の露

二見が浦にて

硯かと拾ふやくぼき石の露

とくくの清水にて

露とくく試に浮世すゝがばや

磯の宮森の露散る朝日かな

乳母草に誰むすべとて朝の露

露時雨

露時雨蜜柑の色にしみたらず

君が崎にて

霧

松なれや霧えいさらえいと曳く程に

あけぼのや霧にうづまく鐘の聲

湯の名残り幾度見るや霧のもと

雲霧の暫時百景つくしけり

霧時雨

霧時雨富士を見ぬ日ぞ面白き

其柳亭にて

秋雨

秋も早はらつく雨に月の形

稻妻

稻妻や闇の方行く五位の聲

敦賀に宿りて

芭蕉名句選集

あの雲は稻妻を待つ便かな

寄 李 下

稻妻を手にとる闇の紙燭哉

成る智識のたまはく「なま禪大疵の基」と

かやいふ有難くて

稻妻に悟らぬ人の尊さよ

稻妻や海のおもてを閃めかす

稻妻や顔のところが芒の穂

◇地 理

幼住庵にて

秋の山 旅 癖 や 寝 冷 煩 ふ 秋 の 山

秋の野 秋 の 野 や 草 の 中 行 く 風 の 音

刈 田 刈 り かけ し 田 の 面 の 鶴 や 里 の 秋

刈り跡や物にまぎれぬ蕎麥の莖

落し水 くり から や 三 度 起 き て も 落 し 水

◇時 候

直江津にて

文 月 文 月 や 六 日 も 常 の 夜 に は 似 す

八 朔 八 朔 や 天 の 橋 立 た ば ね 鬘 斗

秋 來 る 秋 來 に け り 耳 を た づ ね て 枕 の 風

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

初秋
秋來ぬと妻戀ふ星や鹿の聲
夕顔やかいまはるほど秋は來ぬ
初秋や疊ながらの蚊帳の横

鳴海眺望

今朝の秋
初秋や海も青田の一みどり
張抜の猫に見えけり今朝の秋
よるべをいつ一葉に虫の旅寢して

嵐雪に贈る

我が宿の淋しさ思へ桐一葉
同

淋しさを問ふて呉れぬか桐一葉

残暑

牛部屋に蚊の聲暗き残暑かな

ある草庵に誘はれて

秋涼し

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

市廂亭にて

秋の夜

秋の夜をうち崩したる嘶かな

兼好の賛

秋の夜をうしろにしたる法師哉

野晒紀行

身に入

野晒を心に風のしむ身かな

夜寒

乳麵の下焚きつくる夜寒かな

肌寒

湯の名残今宵は肌の寒さかな

芭蕉名句選集

嵐雪が四國に渡る時

二百十日

旅鳥二百十日も船支度

芝相亭にて

秋深
秋の暮

秋深き隣は何をする人ぞ
秋の暮客が亭主か中柱

死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮
枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
思案するに冥途もかくや秋の暮

所思

此の道や行く人なしに秋の暮

清水の茶店に遊ぶ



松風の軒をめぐりて秋くれぬ

雲行の像

こちら向け我も淋しき秋の暮

深川の庵

棒郎の尻聲高し秋の暮

六助六兵衛の人々に芭蕉庵を訪れて故郷

の安否を聞く

幾千里隔つ思ひや秋の暮
船頭の尻聲淋しあきの暮
蛤の二見に別れ行く秋ぞ
行く秋の尙たのもしや青蜜柑

芭蕉名句選集

行く秋や身に引きまたう三布蒲團
行く秋や手を廣げたる栗の毬

憶 老 社

暮 秋

風髭を吹いて暮秋を嘆ずるは誰子ぞ

秋 色

秋の色糖味噌壺もなかりけり

◇人 事

七 夕

七夕や秋を定むる始めの夜

七夕の蓬ぬ心や雨中天

某の御代官に隨身して四國へ赴くに

七夕や裸すどりの俄旅

男 七 夕

月弓や婿の一藝 男 七 夕

星 合

星合の中や絶えなん立田川

吊 雨 星

高水に星も旅寝や岩の上

素堂の母七十餘歳の秋七月七日に壽する

に萬葉の七種をもて題とすこれに連なる

もの七人此結縁にふれて己々又七處の齡

にならむ

七株の萩の手本や星の秋

魂 祭

蓮池や折らでそのまゝ魂祭

鳥部山にて

魂祭けふも焼場の煙かな

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

尼壽貞が身まかりけるを聞て
數ならぬ身とぞ思ひぞ魂祭

加賀の國を過ぐる時

熊坂がゆかりやいつの玉まつり
稻の穂の露ばかりなる魂祭り

骸骨の繪に

盆提灯
夕風や盆提灯も糊ばなれ

郷里に歸り盆會を營んで

墓參
家は皆杖に白髪の墓參り
駒迎
機やまづ思ひ出づ駒迎へ

吉野西行庵

硯洗
硯洗ふ智慧は出でたり苔清水
御遷宮
尊さに皆押し合ぬ御遷宮
重陽
盃の下行く菊や朽木盆

九月九日乙州が一樽を携へ來たりければ

草の戸や日暮れて呉れし菊の酒

大和國竹の内にて

綿弓
綿弓や琵琶に慰む竹の奥
綿弓や窓に夕日の影さむき

丸岡天龍寺を出づる時金澤の北枝と別れ

に臨みて

秋扇
物置いて扇引きさく餘波哉

芭蕉名句選集

角力

昔聞け秩父殿さへ角力取
角髪や奥を出羽の角力取

許六が繪に

砧

勝相撲いつも上手に米の飯
聲澄て北斗にひよく砧かな
猿引は猿の小袖を砧かな

吉野にて

砧打ち我れに聞かせる坊が妻

近江路を通る日野山の邊にて胡摩と云ふ

者に上の衣をとられて

剥れたる身には砧のひよきかな

藥堀 茸狩 鮭馬 漆搔 菊胎

鍼立つや肩に槌つう唐衣
村雨を背中に負ふて柴胡堀
茸狩やあぶないことに夕しぐれ
鮭馬のかけ見ぬ關の渡し舟
漆搔に我も出でなむ朝がらす
堅田某亭にて
蝶も來て酔を吸ふ菊のなます哉

◇動物

堅田にて

雁

病雁の夜寒く落ちて旅寝哉

堅田落雁

鳥の文堅田の雁よ片便宜
初風やたゞ白雲に雁ひとつ
雲と隔つる友がや雁の生き別れ
目にかゝる時や暫しの渡り鳥
世渡りや渡りくらべて渡り鳥
鷹の目も今や暮れむと鳴く鶉

田莊酒家

桐の木に鶉なくなる塀の内
老の名のありとも知らで四十雀
稻雀 茶木 島や逃げ處

鳴鹿

蟲 蜻蛉

刈跡や早稻かたくの鳴の聲
ひれふりて女鹿もよるや男鹿山
びいとなく尻聲悲し夜の鹿
武藏野や一寸程な鹿の聲
秋來ぬと妻こふほしや鹿の友
女夫鹿や毛に毛が揃ふて毛むづかし
鹿の角まづ一節のわかれかな
盆すぎて宵闇くらし蟲の聲
よるべをいつ一葉に蟲の旅寝して
夜窈かに蟲は月下の粟を穿つ
蜻蛉やとり付きかねし草の上

蟋蟀

芭蕉名句選集

白髪ぬく枕の下やきりぐす
猪の床にも入るやきりぐす
朝なく手習進むきりぐす
寂しや釘にかけたるきりぐす
床に来て駢に入るや蟋蟀
静かさや繪かゝる壁のきりぐす

太田の神社にて

蛸 蟻 蟬
蝶 蟲

むざんやな兜下のきりぐす
蟹の屋は小海老もまじるいと哉
蟻蟲の音を聞きに来よ草の庵
麻福田袴よそふやつくぐし

秋 蝶

秋を経て蝶もなめなる菊の露

高瀬の漁火と云ふ題を得て

河 鹿
蛙 紅葉餅

篝火に河鹿や浪の下むせび
蛙馬のかけん見ん關の渡し舟
これも又水生木や紅葉餅

◇植 物

柿

里ふりに柿の木持たぬ家もなし
菟藟と柿と嬉しき草の庵
澁柿や一口は喰ふ猿の面
斗休亭にて

芭蕉名句選集

栗

祖父と親その子の庭や柿蜜柑
夜ひそかに蟲は月下の栗を穿つ
秋風の吹いても青し栗の毬

杉の竹葉軒を尋ねて

榎の實
木の實

栗稗に貧しくもあらず草の庵
よき家や雀よろこぶ背戸の栗
榎の實散る椋の羽音や朝嵐
木曾の椽浮世の人の土産哉
藤の實は俳諧にせん花の後
籠りゐて木の實草の實拾はゞや
山は皆蜜柑の色の黄になりて

蜜柑

柳散る

何喰ふて小家は秋の柳蔭
全昌寺にて

庭掃いて出ばや精舎に散る柳

柳陰軒にて

木槿

散る柳あるじも我れも鐘を聞く
道端の木槿は馬に喰はれけり
花木槿裸わらべのかさしかな
霧雨の空を芙蓉の天氣かな
枝振りの日に日に代る芙蓉かな

芙蓉

伊勢斗從に山家を訪ねて

蕎麥の花

蕎麥はまだ花でもてなす山路哉
芭蕉名句選集

朝顔

芭蕉名句選集

朝顔の花になり行く蚊の弱り

和其角蓼蚤句

朝顔に我れは飯喰ふ男かな

閉關

朝顔や晝は鎖おろす門の垣

當摩寺にて

僧朝顔幾死かへる法の松

嵐雪が繪に讚を望みければ

朝顔は下手の書くさへ哀れなり

鶏頭

鶏頭や雁の來る時尙ほ赤し

菊の香や奈良には古き佛達

菊の香や奈良は幾世の男振

菊の露落ちて拾へばぬかこ哉

見處のあれや軒端の後の菊

田家に宿りて

稻こぎの姥も目出たし菊の花

八丁堀にて

菊の花咲くや石屋の石の面

如行亭

瘦ながらわりなき菊の蕾かな

生國の邊りより日を暮して

菊に出て奈良と難波は宵月夜

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

草庵の雨

起きあがる菊ほのかなり水の跡

山中温泉

山中や菊は手折らぬ湯の匂ひ

水因亭

かくれ家や月と菊とに田三反

開峠にて

菊の香にくらがり登る節句かな

初冬九日素堂菊園に遊

菊の香や庭にきれたる履の底

菊花の賛

折りふしは酢になる菊のさかな哉

悦堂和尚の隠室に招かれて

香を残す蘭張菊のやどりかな

借水亭にて

影待や菊の香のする豆腐串

大門通を過ぐるに

琴箱や古物店の背戸の菊

左柳亭にて

早く咲け九日も近し宿の菊

十日の菊

十六夜の何れか今朝に残る菊

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

一露もこぼさぬ菊の雫かな
朝茶のむ僧静かなり菊の花
蕎麥は皆なりからませよ野良の菊
盃の下ゆく菊や朽木盃
菊の後大根の外更になし
山科の五荷三束や菊の花

園女亭にて

白菊
芭蕉

白菊の目に立て見る塵もなし
此の寺は庭一ぱいの芭蕉哉

畫 讚

鶴なくやその聲に芭蕉破れぬべし

萩

萩原や一夜は宿せ山の犬
寝たる萩や容顔無禮花のかほ
ひとつ家に遊女も寝たり萩と月

畫 讚

白露もこぼさぬ萩のうねり哉

種の濱

浪の間や小貝にまじる萩の塵

いろの濱

小萩散れますほの小貝小盃

加賀の小松と云ふ所にて

しほらしや名や小松吹く萩芒

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

観水亭雨中の會

ぬれて行く人も可笑しや雨の萩

藤堂玄虎子が庭の半に作りしを見て

風色やしどろに植えし庭の萩
萩の露米つく宿のとなり哉
萩の聲こや秋風の口うつし
ひよろくと猶露けしや女郎花

女郎花

玉居の水に溺れな女郎花
見るに我もおれる斗ぞ女郎花
水なき時は飄におみなへし
秋海棠西瓜の色に咲にけり

秋海棠

茶店の女に句を乞はれて

蘭の香や蝶の翼にたきものす

丸岡天龍寺にて

門に入れば蘇鉄に蘭の匂ひかな
何事も招きはてたる芒かな
草色々おのく花の手柄なり

芒

草の花

高田醫師細川青庵にて

薬蘭にいづれの花を草枕
野の宮の鳥居に葛もなかりけり
葛の葉は昔めきたる紅葉哉

葛

加賀の國に入

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

稻 早稲の香や分け入る右は有磯海

人に稻を貰ふて

落穂 世の中は稻刈る頃か草の庵
いたゞいて落穂拾はん關の前

後醍醐帝御陵を拜む

葱 御廟年を経て忍ぶは何を葱草

水葱 なまぐさし水葱の上の腕の腸

鬼灯 鬼灯は實も葉もからも紅葉哉

蕃椒 青くて有るべきものを唐辛子

かゝさぬぞ宿は菜汁に唐辛子

木曾塚の草庵にうりて

唐黍 草の戸を知れや穂蓼に唐辛子
唐黍や軒端の萩のとりちかひ

竹葉軒と云ふ庵を訪れて

粟 粟稗に貧しくもあらず草の庵

初茸 初茸やまだ日數経ぬ秋の露

松茸 松茸やかぶれた程は松の形

松茸や知らぬ木の葉のへばり付
その匂ひ籠より洩るゝ松茸の

木曾路に馬から落ちて

木の子 馬士に落さるゝ身は木の子哉

茸狩 菌狩やあぶない事に夕時雨

芭蕉名句選集

四山の銘

瓢

ものひとつ瓢はかるき我が世哉
故人に逢ふて

冬瓜

冬瓜や互にかはる顔の形

西行谷

芋

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

扇風を悼

大根

手向けり芋は蓮に似たるとて
口上に書き落しけり土大根
武士の大根辛きはなしかな
三千里尾張大根の話かな

草の種
薄紅葉
紅葉

草皆枯れて哀をこぼす草の種
色づくや豆腐に落ちて薄紅葉
百景や杉の木の間にいるみ草

◇秋 雑

見渡せば眺れば見れば須磨の秋
おもしろき秋の朝寝や亭主ぶり
雨の日や世間の秋を堺町
秋十とせ却つて江戸をさす故郷
刈りかけし田の面の鶴や里の秋

神 前

この松の實ばえせし代や神の秋
旅 懐

この秋は何で年よる雲に鳥
秋に添ふて行かばや末は小松川
さらでだに秋よ野寺の一つ鐘
いく秋のせまりて芥子の隠れけり
裸にはまだ衣裏着の嵐かな
三尺の山も嵐の木の葉かな
秋さみし編笠着たる人のなり
あめの魚ありもやすらん富士の湖
夜歩行に空樽の音や浦の秋

胡蝶にもならんで秋経る菜蟲哉
後家の秋ものゝ哀をとどめたり

冬の部

◇天文

冬 空

我が爲めに日うらゝなり冬の空
風の身は竹齋に似たる哉(狂句)
風や頬腫いたむ人の顔

竹 畫 讃

風や竹にかくれて静まりぬ

三州鳳來寺

芭蕉名句選集

木枯に岩吹き尖る杉間かな

三州新城菅沼權右衛門宅

初時雨

京に倦て此の風や冬住居
木枯に匂ひやつけて歸り花
木枯の町にも入るや鯨うり
摘みけんや茶を木枯の秋とも知らで
初時雨しづかに渡るかつら川
人の方へ始めて行きて

初時雨の字をわが時雨かな

錢別會江戸を出づるに

旅人とわが名呼ばれむ初時雨

時雨

けふばかり人も年よれ初時雨
渡し呼ぶ人は我なり初時雨

十月三日許六亭

伊賀の山越

初しぐれ猿も小籠をほしげなり
笠もなき我を時雨かこは何と
馬士は知らじ時雨の大井川
いづこ時雨笠を手にさげて歸る僧
草枕犬もしぐるゝ夜の聲
鶏の聲にしぐるゝ牛屋かな
ゆく雲や犬の逃吠村時雨

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

時雨ゆくや船の帆綱に取り付て
一尾根はしぐるゝ雲か不二の雲
火吹竹音や時雨れて小豆飯
新藁の出そめて早き時雨哉
村時雨てれふれ町の名なるべし

戸田権太夫亭

一時雨磔や降つて小石川

草庵

人々を時雨よ宿は寒くとも

美濃垂井矩外が許にて

作り木の庭をいさめる時雨哉

舊里の路すがら

時雨るるや田の荒株の黒むほど

張笠の銘

世にふるは更に宗祇の時雨哉

旅宿の寢覺に故郷を思ひて

夜荒しや時雨の底の旅枕

そぼちて更にわれをせむ

糸に唯聲のこぼるゝ時雨かな

島田の宿塚本が家に至りて

宿かして名を名乗らす時雨かな
此海に草鞋捨てけん笠しぐれ

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

霧時雨

冬の雨

寒の雨

初霜

霜

山城へ井手の駕籠かるしぐれかな
 時雨ふれ笠松へ着く日なりけり
 霧時雨富士を見ぬ日ぞ面白き
 面白し雲にやならん冬の雨
 雁さわぐ鳥羽の田の面や寒の雨
 初霜や菊冷えそむる腰の綿
 貧山の釜霜になく聲淋し
 からくと折ふし凄じ竹の霜
 借りて寝ん案山子の袖や夜半の霜
 夜すがらや竹氷らする今朝の霜
 葛の葉の表見せけりけさの霜

紙衣にも霜や置くかと撫て見し
 樽田に霜の花見るあした哉

深川大橋成就せし時

有難やいたゞいて踏む夜の霜

鎌倉に行く人を送る

霜踏んで蹠跛ひくまで送りけり

杜國が庵を訪れて

さればこそなれたきまゝの霜の宿
 薬のむさらでも霜の枕かな
 せきれいの足どり軽し橋の霜

奈良にて

芭蕉名句選集

初雪

初雪やいつ大佛の柱立

旅中

初雪やひじり小僧の笈の色

深川大橋のかゝりたる時

初雪やかけかゝりたる橋の上

初雪や水仙の葉のたわむほど

初雪や幸庵にまかり在る

雪

雪の朝ひとり乾鮭かみ得たり

雪花は南の枝や遅さくら

大雪や婆ひとり住む藪の家

時雨をやもとかしがりて松の雪

今朝の雪根深の園の葉哉

日頃惜む鳥も雪のあしたかな

笠の緒や咽くろしむる不二の雪

いざさらば雪見にころぶ處まで

酒のめばいと寝られぬ夜の雪

雪を待つ上戸の額いなびかり

箱根こす人もあるらし今朝の雪

雪の日や羅紗の羽織にたゝき鞘

雪の竹笛つくるべう節あらん

湖水から光り出しけり比良の雪

寒山齋讚

芭蕉名句選集

庭掃きて雪を忘るゝ箒かな

芭蕉 讚

たわみては雪待つ竹の景色かな

小野小町 讚

貴さや雪降ぬ日も簀と笠

雪見にありきて

市人にいでこれ賣らん雪の笠

旅人を送る

馬をさへ眺むる雪のあした哉

山中にて子供と遊びて

雪の日に兎の皮の髪つくれ

陸の奥猫山にて

山は猫眠りはひてや雪のひま

子におくれたる人の許にて

しをれふすや世は逆まの雪の竹

庵に移りて

深川や根こしの芭蕉雪かこひ

湖水眺望

比良三上雪かけわたせ鷺の橋

去年の詫寝を思ひ出て越の人に送る

二人見し雪は今年も降りけるか

對友人曾良

君火たけよきもの見せむ雪丸げ

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

草庵に士あり

木枕の油ぬぐふや夜の雪
少將の尼のはなしや志賀の雪
京まではまだ半空や雪の雲
富士の雪盧生が夢につかせけり
誘へ雪白衣の天狗比良の雪
浪の花と雪もや水に返り花

熱田の宮修葺なりぬ

磨返す鏡も清く雪の花

陸の奥黒森にて

黒森をなにといふとも今朝の雪

霞

雪寒し馬にも乗れぬ我が身かな
積れく風く起て見む夜の雪
雪毎にうつはり機む住居かな

深川八貧の内

米買ひに雪の袋や投げ頭巾
霞まじる帷子雪は小紋かな
勇み立つ鷹引き据える霞かな
石山の石にたばしる霞かな
雑炊に琵琶聞く軒の霞哉
いざ子供走り歩かん玉霞

自畫自賛

芭蕉名句選集

芭蕉名句選集

いかめしき音や霰の檜笠

與或人文

冬知らぬ宿や靱磨る音霰

如行亭にて

琵琶行きの夜や三絃の玉霰

再芭蕉庵を營めて

霰きくやこの身は元の古柏

膳所の草庵を人々訪ひけるに

霰せよ網代の氷魚煮て出さん

柵の葉にはねかへる霰かな

松風を花にかんじて居るかな

◇地理

初氷 芹焼や裾輪の田井の初氷

氷 瓶破るゝ夜の氷の寢覺哉

すくみ行く馬上に氷る影法師

深川夜冬の戒

櫓聲波うつて陽氷る夜や涙

茅舎買米

氷若く偃鼠が咽をうるほせう

枯野 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

霜野 霜かれて咲くは辛氣の花野哉

芭蕉名句選集

◇時 候

小春 月の鏡小春に見るや目正月
 冬枯 や世は一色に風のおと
 冬枯 や磯に今朝見るとさか哉
 冬枯 や在所の雨が横に降る
 寒の入 月花の愚に鍛立てん寒の入
 寒の内 乾鮭も空なり疲も寒の内
 寒さ 綿弓や窓に入る日の影寒さ
 塙鯛の齒ぐきも寒し魚の店
 葱白く洗ひ上げたる寒さ哉

松葉を焚いて手拭あぶる寒さ哉

越の人と吉田驛に宿りて

寒けれど二人旅寝ぞたのもしき

仙化が父の追善

袖の色よごれて寒し濃鼠
 山寒し心の底や水の色
 によきくと帆柱寒き入江かな
 寒き夜に不破の關もる人は誰ぞ
 吉野まで行ずに歸る寒さかな
 蠟燭に顔のてらつく寒さかな
 冬寒しあくびをうつす息の色

師走

夜着に寝て雁金寒し旅の宿
被ぎふす蒲團や寒き夜の凄さ
何にこの師走の市に行く馬
隠れけり師走の湖のかいつぶり
月向き師走は子路が寢覺哉

十二月九日一井亭

旅寢よし宿は師走の夕月夜

杜國亭にて中惡き人のこと杯とりつくる

ひて

雲と雪今宵師走の明月か
雨霰雪も氷も師走から

歳暮

五百丸へ元服の祝に

春やたつまた春や見むこの師走
なりにけりなりにけり迄年の暮
分別の底にたゞきけり年の暮
蛤の生る甲斐あれ年の暮
盗人に逢ふた夜もあり年の暮
くれく／＼て餅を餅のわび寝かな
月雪とのさばりけらん年の暮
皆拜め二見の七五三を年の暮
魚鳥の心は知らじ年の暮
忘れ草菜飯につまん年の暮

芭蕉名句選集

古郷や臍の緒に泣く年の暮
目出度人の數にも入らん年の暮

こゝに草鞋を解き彼所に杖を捨て、旅寢
ながらに年暮れければ

行年

年暮れぬ笠着て草鞋穿きながら
古法眼ところあはれ年の暮
行年や瀬田を廻る金飛脚
行年の目さまし草や茶釜賣
行年の女歌舞伎や夜のうち
行年や薬に見たき梅の花

畫 讃

年の瀬

行年や汝が親の小松賣
くれて行く年のもうけや伊勢熊野
此の忘れ流るゝ年の淀ならん

◇人 事

十一月初日深川の舊草に歸りて朝暮敲戸
の面々に對す

神の旅 都出て神も旅寢の日數かな
神の留守 留守の間に荒れたる神の落葉かな
夷講 夷講酔賣に袴着せにけり
振賣の雁哀れなり夷講

芭蕉名句選集

御命講

御命講や油のやうな酒五升

菊鶏頭おほけなるは身延山

菊鶏頭切り盡しけり御命講

御取越

水涕に誠見せけり御取越

亥の子

畔物の亥の子の餅や歸り花

口切

口切りに堺の庭ぞなつかしき

爐開

爐開や左官老いゆく鬢の霜

紙衣

ためつけて雪見にまかる紙子哉

衾

着て立てば夜の衾もなかりけり

夜着

夜着は重し吳天に雪を見るあらむ

畫 贊

紙衾
蒲團
頭巾

たのむぞよ寝酒なき夜の紙衾
かつぎふす蒲團や寒き夜や凄さ
頭巾着た顔さしこむや繩簾

貞徳翁の讚

冬籠

雅名や知らぬ翁の丸頭巾
冬籠りまた寄添はん此の柱

權七に示す

先づ祝へ梅を心の冬ごもり

金屏風松の古びや冬籠

千川亭に遊びて

折々に伊吹を見てや冬籠

芭蕉名句選集

炭
 難波津や田螺のふたも冬籠
 後の世はいかどなるらむ冬籠
 屏風には山を描いて冬籠
 消炭に薪わる音か小野の奥
 白炭やの浦島が老の箱
 小野炭や習ふ人の灰にせり

曲翠旅箱にて

埋 火
 埋 火 や 譬 は 客 の 影 法 師

少年を失へる人に

埋 火 も 消 ゆ る や 泪 の 烹 る 音

火 桶
 あらかねの土より起る火桶哉

古き世を偲びて

火 鉢
 霜の後なでしこ咲ける火桶哉
 深草やこれも浅草火鉢かな
 骨柴やかくと見るより蝶の殻
 住みつかぬ旅の心や置炬燵
 きりくす忘れ音に鳴く炬燵哉

圍 爐 裏
 鉢 叩
 硯好む奈良の法師が炬燵哉
 五つ六つ茶の子に並ぶ圍爐裏哉
 長嘯の塚もめぐるか鉢叩
 納豆賣る音暫しまた鉢叩

古曆
節季候
うか／＼と年寄る人や古曆
節季候を雀の笑ふ出立哉

探梅
節季候の來ては風雅も師走哉
うちよりて花活さぐれ梅椿
香を探ぐる梅に藏見る軒端哉

霰酒
千代をふる天のてんふる霰酒
さし籠る葎の友か冬菜賣

冬菜賣
旅寢して見しや浮世の煤掃
煤掃や暮れ行く宿の高軒

煤掃
煤掃は己が棚つる大工哉
これや世の煤に染らぬ古盒子

旅行

煤掃は松の木の間の嵐かな
煤拂ひ牛のしらみの榎かな
破れ箆をかりて來たりな煤拂
年忘れ三人よりて喧嘩かな
年忘れ三人よりて喧嘩かな
せつかれて年忘れする機嫌哉

乙州が新宅に春を待ちて

人に家を買はせて我れは年忘

洛御靈別當景當丸興行

餅搗
半日は神を友にや年忘れ
有明も三十日に近し餅の音

衣配 松島や雪の白地の衣くばり
年の市 一休の土器買はむ年の市
年の市線香買ひに出でばやな

畫 贊

年とり物 須磨の浦年とりてのや柴一把
厄拂 うとまるゝ身は梶原が厄はらひ
偽の舌に骨なし厄拂ひ

◇動物

都鳥 鹽にしていざことづけむ都鳥
千鳥 一疋のはね馬もなし川千鳥

寢覺は、松風の里、呼續は夜明けてから、

笠寺は、雪の降日

星崎の闇を見よとや啼く千鳥

桑名古益亭にて

鴨
冬牡丹千鳥よ雪よほとゝぎす
ひだるさよ寒さよ須磨の磯千鳥
毛衣につゝみてぬくし鴨の足

人々師走の海見んと船さし出しければ

鷗
海暮れて鴨の聲ほのかに白し
水寒く寝入りかねたる鷗かな

杜國を訪ひける路すがら